

平成 20 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18730139

研究課題名（和文） カール・ポランニーの社会経済思想

研究課題名（英文） Social and economic thought of Karl Polanyi

研究代表者 若森 みどり (WAKAMORI MIDORI)

首都大学東京・社会科学部研究科・准教授

研究者番号 20347264

研究成果の概要：第1次世界大戦、ロシア革命、1930年代の世界恐慌、ファシズム、ニュー・ディール、福祉国家の誕生といった20世紀前半の激動の時代を「大転換」と名づけたハンガリー系の社会学者カール・ポランニー（Karl Polanyi；1886-1964）の思想は、これまで経済人類学者や市場原理主義批判者として部分的に受容されてきた。本研究では、21世紀の新しい国際的なポランニーの研究動向を踏まえながら、主著『大転換』の思想的起源やその後の展開を辿り、人間の自由と社会の現実、経済と社会、といった対極的なくポランニー的思考の把握に努めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	650,000	0	650,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,650,000	150,000	1,800,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想（3602）

キーワード：ポランニー、ウェーバー、経済制度、市場社会、自由、民主主義、ファシズム

1. 研究開始当初の背景

ポランニーの主著『大転換』は、二重運動や擬制商品についての概念が登場する第6章のみが読まれ、全体としてどのような主題が構成されているのか、十分に読まれることがない、という特徴を持っている。また、『大転換』後のポランニーが何を追究したか、彼は経済人類学者になって現代社会から古代の経済制度に関心を移したのか、研究史上、明らかにしなければならない論点があった。また、『大転換』の思想的な源泉を探るため

の資料の刊行の企画が2002年以降相次いでヨーロッパで始まったために、そうした研究資料の新しい環境に対応する必要があった。

2. 研究の目的

研究の目的は、＜経済を社会に埋め込むことによって、自由、産業文明、権力を和解させる＞（ソマーズ）という＜ポランニーの包括的なプロジェクト＞を、思想的に掘り起こすことである。ポランニーにとって自由はどのような概念か。「社会の現実」という概念

は、自由と対立しながら関連するキーワードであるが、それは権力や産業文明といかに関連しているか。こうしたテーマを探ることが、研究の目的である。

3. 研究の方法

研究の全期間を通じて、1) ドイツ語版のポランニー未収録著作集の検討を通じて『大転換』の思想的な源泉を辿ることによって、および2) 『大転換』後(第2次世界大戦後)の論文、とりわけ遺稿集『人間の経済』においてそれらがどのように提起されるようになったか、ポランニーをとりまく知的背景や彼の思想の一貫性と用語方法の変化について、綿密に検討を行った。従来の訳語—たとえば **Substantive** が実在=実体と訳されている—にみられるように、日本におけるポランニー研究は、国際的なポランニー研究の動向を反映したものになっていない点に十分に留意し、取り組んだ。収録されていない関連資料は、モントリオールのカール・ポランニー政治経済学研究所所蔵のアーカイブを参照した。

4. 研究成果

平成18年度は、ポランニーの母国ハンガリーのブダペストと、ポランニーとドラッカーが青年期の思想形成時に過ごしたウィーンを訪ねた。ウィーンでは、ノイラート、ミーゼス、ポランニーに連なる社会主義経済論争の舞台となったウィーン学団などの当時の思想的背景を調査した。そして、1920年代の社会主義ウィーンの住宅政策からジュネーブが先導する通貨政策への転換というポランニーの『大転換』の思想的起源のひとつをここに確認した。ブダペストでは中欧大学(Central European University)を訪ね、非英語圏を代表するポランニー研究者であるリトバーンの最新の研究書『20世紀の預言者、オスカル・ヤーシ』を入手した。若き日のポランニーが秘書を務めた自由主義活動家ヤーシとの生涯に渡る思想交流を資料的に開拓する可能性が拓けた。また、社会に経済を埋め込む方法としての「倫理」という塩野谷祐一氏の経済社会学方法論を学びながら、ポランニーにおける文化と福祉の概念について調査し、論文を執筆した(「ポランニー: 社会の自己防衛から福祉国家の哲学へ」小峯敦編『福祉の経済思想家たち』ナカニシヤ出版)。

平成19年度は、経済人類学的な書物として読まれてきたポランニーの遺稿集『人間の経済』を、思想史として新たに読み解く可能性を提起し、検討してきた。『人間の経済』の第三部「古代ギリシアにおける交易・市場・貨幣」と編集されたポランニーの古代ギリシア論を解説し、〈市場の位置を理解する

ことはポリスを理解することにほかならない〉という命題の意味を探った。こうした解説の仮説を裏付けつつ、平成19年9月～11月は、上智大学大学院セミナーでのポランニーの社会哲学についての研究報告(11月26日)を行い、リサーチ・ペーパー(12月)を作成した。平成20年1月から3月にかけては経済学史学会若手育成国際セミナーでのポランニーの研究報告(一橋大学3月17日)に向けて英語報告の準備に取り組みながら、20年5月に愛媛大学で開催される第72回経済学史学会全国大会用の報告論文「ポランニーにおける『経済と社会』」を執筆した(3月15日提出)。この春の作業をもとに、平成20年4月30日に、経済学史学会若手育成国際セミナーでのコメントにしたがって書き直し、英文訂正を行い、英語論文の改訂ヴァージョンを完成させた(経済学史学会 Lecture Note vol.1)。

平成20年度は、第1に、『大転換』後のポランニーが晩年まで追及した〈経済と社会〉というテーマ、それを追求するための〈社会における経済の位置〉という制度主義的方法について検討を行った。経済学者であるロビンズやナイトも関与した、英米におけるウェーバー受容とポランニーの接点がこの晩年のポランニーの研究計画において重要であることを提起した研究報告を内外の学会で示した(経済学史学会第72回全国大会、開催地: 愛媛大学、第11回カール・ポランニー国際会議、開催地: モントリオール)。晩年のポランニーの研究業績が経済人類学の専門分野に狭く位置づけられてきた経緯をこの観点から相対化した本研究報告は、ポランニー国際会議において盛況な議論と好意的な反応を獲得した。ポランニー国際会議報告原稿を改訂し、経済学史学会 Lecture Note vol.1 掲載原稿と差し替えを依頼した。

第2に、イタリア、ドイツ、フランスの研究者らによって近年相次いで刊行された、カール・ポランニーの未収録著作集を検討し、とりわけ1927年の自由論と1930年代から鋭く展開された民主主義論の解説を集中的に行なった。その研究成果として、千葉大COEプログラム(労働と公共性部門)の研究会での報告および論文を執筆した(「カール・ポランニーにおける市場社会と民主主義」、安孫子誠男・水島治郎編著『労働—公共性と労働・福祉ネクサス』勁草書房、2009年9月公刊予定)。また、イタリア経済思想史学会若手育成=国際交流プログラムに参加し、本研究課題を単行本にまとめるための準備の一環として、「なぜポランニーは経済思想史において読まれなかったか?」という報告を行い日本における

ポランニー受容の課題などを提起し、ポランニーを思想史研究に組み入れることの工夫などについて有益な助言を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

① Midori WAKAMORI “Karl Polanyi’s Research Agenda toward The Livelihood of Man(1977) : From Weber to Polanyi” *Lecture Note* (経済学史学会) VOL.1 2008 (現在、pp.40-56 に掲載中の “Karl Polanyi’s Method and ‘the Place of Economies in Societies’” と差し替える依頼を2009年2月に行った)。査読有

② Midori WAKAMORI “Karl Polanyi’s Social Philosophy : His Research Program from *The Great Transformation* (1944) to *The Livelihood of Man*(1977)”, December 2007 Research Paper Series, (Graduate School of Social Sciences Tokyo Metropolitan University) No. 41, pp. 1-15 査読無.

③ 若森 みどり「カール・ポランニーにおける『経済と社会』」経済学史学会第72回大会(2008年5月)報告論集、84-89頁 査読無。

④ Midori WAKAMORI, “Karl Polanyi’s Method and ‘the Place of Economies in Societies’” *Lecture Note* (経済学史学会) VOL.1 pp.40-56 2008. 査読有.

[学会発表] (計 6 件)

① 若森 みどり「ポランニー的課題」「公共性とポランニー的課題について」21世紀COEプログラム・持続可能な福祉社会に向けた国際研究拠点・千葉大学人文社会研究科・国際公共比較部門対話研究会2008年12月26日首都大学東京、秋葉原サテライトキャンパス.

② Midori WAKAMORI “Karl Polanyi’s Research Agenda toward The Livelihood of Man(1977) : From Weber to Polanyi

” The 11th International Karl Polanyi Conference2008年12月9日 コンコーディア大学(モントリオール、カナダ).

③ Midori WAKAMORI, “How to read Polanyi in the History of Economic Thought?” STOREP European Summer School2008年8月29日 ブレッサノーネ(イタリア).

④ 若森 みどり「カール・ポランニーにおける『経済と社会』」経済学史学会第72回全国大会2008年5月24日愛媛大学.

⑤ Midori WAKAMORI “Karl Polanyi’s Method and ‘the Place of Economy in Society’” Young Scholar’s Seminar2008 : Economics between the mid-nineteenth and mid-twenty century, Japan Society of Economic Thought2008年3月17日一橋大学.

⑥ Midori WAKAMORI “Karl Polanyi’s Research Program from *The Great Transformation*(1944) to *The Livelihood of Man*(1977)” 平井俊彰・パオロ・ピアセンティーニ(ローマ大学)による大学院合同セミナー2007年11月26日、上智大学.

[図書] (計 4 件)

① 安孫子誠男・水島治郎編著『労働—公共性と労働—福祉ネクサス』(『持続可能な福祉社会へ公共性の視座から(仮)第3巻』)、勁草書房、2009年9月刊行予定。若森みどりの担当論文「カール・ポランニーにおける市場社会と民主主義(ページ数未定)

② 小峯敦編著『福祉の経済思想家たち』、ナカニシヤ出版、2007年、若森みどり担当分「ポランニー：社会の自己防衛から福祉国家の哲学へ」207-217頁。

③ 進化経済学会編『進化経済学ハンドブック』共立出版2006年、若森みどり担当分「文化人類学」528頁。

④ 橋本努編著『20世紀の経済学の諸潮流』経済思想 第8巻、日本経済評論社、2006年、

若森みどり担当分「カール・ポランニー・社会の現実・二重運動・人間の自由」309-352頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

Lecture Note（経済学史学会）掲載原稿のHP
：
<http://room409-1.ih.otaru-uc.ac.jp/~ysdp/lecturenotes.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若森みどり (WAKAMORI MIDORI)
首都大学東京 社会科学部研究科・ 准教授
研究者番号：20347264

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者